

「帝国の世界秩序とその後を考える北大・UMAシンポジウム」を開催

北海道大学は戦略的国際パートナー校である米国マサチューセッツ大学アマースト校 (UMass Amherst, UMA) と、3月7日 (金)、11日 (火) に「HU-UMA Symposium on Post/Imperial Political Ecosystems: How Our World Has Been Shaped (北大・UMAシンポジウム 帝国の世界秩序とその後：いかに我々の世界は作られてきたのか)」を開催しました。両校は札幌農学校、マサチューセッツ農科大学の時代から長く連携関係にあり、近年は研究者のジョイントアポイントメント等を経て、主として高分子工学、情報・計算機科学、農学、工学、水圏の研究連携、文書館が所有する農学校時代の資料共有等での動きが活発化しています。

昨年11月の両校の中東地域研究者・現代史研究者のマッチングを経て開催される運びとなった本シンポジウムには、講演者及びモデレータとして本学スラブ・ユーラシア研究センターの長縄宣博センター長、青島陽子教授、デイヴィッド・ウルフ教授、メディア・コミュニケーション研究院のジョナサン・ブル講師、公共政策学連携研究部の池畑周直美教授、国際連携推進本部の植村妙菜学術主任専門職、UMAユダヤ・近東学科のデイヴィッド・メドニコフ学科長、政治学科のアンドリュエー・マーチ教授、歴史学科のガレット・ワシントン准教授、アイゼンバーグ経営大学院のボフダン・プロコポヴィッチ上席講師が集いました。「アジア・中東から20世紀を再考する」「帝国の遺産：日本帝国の終焉、国境を跨ぐ人の移動、比較の文脈」「帝国後のウクライナ」の3つのセッションとパネルディスカッションから成る今回のシンポジウムは、20世紀における諸帝国の崩壊が今日の世界で我々が直面する危機にまでいかに影響を与えているかを改めて考える機会となりました。

本シンポジウムには、両校の教職員と学生に加え、両国の大学教員、研究支援機関、外務省出身者、病院関係者から、インド科学技術大学、ポルトガ

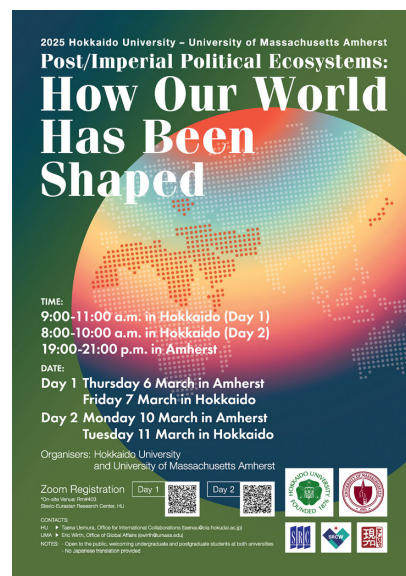
ルのリスボン大学、イスラエルの医療機関、インドネシアの漁業関係者まで70名が参加登録し、地域を超えた関心の高さがうかがえました。参加者からは、「大戦後や帝国崩壊に伴う引き揚げの状況を伝える戦争資料博物館の展示物を比較することで我々が学ぶべきことは何か」「博物館のキュレーターにインタビューする場合、インタビュアーの国籍や立場が回答に影響することは否めないのではないか」「ソ連崩壊後のロシアが西側に受け込もうとしてきたのは意図的な策略だったのか」「多民族国家における権威主義体制には先行する帝国秩序の遺産が作用しているのではないか」「欧米がよかれと思っで行う法秩序形成の支援が中東において感情的な反発を招き、対話を難しくする局面がある」等の質問や意見がありました。

本学の高橋 彩理事・副学長 (国際担当) からは、「スラブ・ユーラシア研究センターの『生存戦略研究プラットフォーム』とUMAの連携により、更に多角的な視点と研究の深化を期待する」ことが述べられ、瀬戸口剛理事・副学長 (研究担当) からは、「人文社会学は異分野融合研究においても重要性が認識されているが、大学コミュニティの中と外とを繋ぐ力でもある」との発言がありました。UMAのカルベン・トリヴェディ国際担当副プロボストからは、「数年前にUMA研究担当執行部が国際連携方針を固める際、北大との連携に力を割くということで一致した。両校の連携は2025年度から始まる、研究者のモビリティ支援でも広がっていく」との見立てが示され、人文学・芸術学研究院のパーリ・リアーヒ副研究院長 (研究連携担当) からは「人の心と想いには物語る力が、人文社会学には物事を可視化し理解する力がある。今回も分野をまたぐ研究者が集まり、時間と空間を超越した思索の共有となった」との話がありました。帝国崩壊の遺産を引きずる中東とウクライナ、冷戦が完全には終わっていな

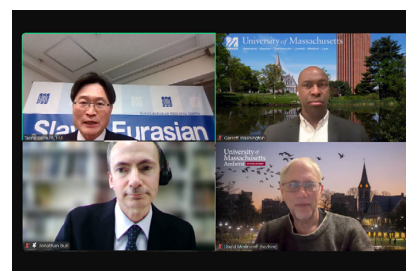
い東アジアの日本について日米の研究者が議論を交わすことの学術的な意義は大きく、今般のイベントで得たアイデアをさらに発展させるべく、講演者たちは今年度中に本学で再会することが決まっています。

・生存戦略研究プラットフォーム
<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/srcw/>

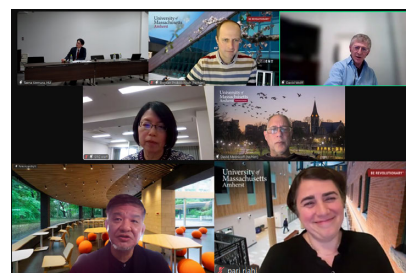
(スラブ・ユーラシア研究センター、国際連携推進本部)



フライヤー



1日目の様子



2日目の様子：パネリストたちと瀬戸口理事 (左下) とリアーヒ副研究院長 (右下)